内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』における宋詩の引用状況

劉　　玲

0　本稿の研究経緯と目的

漢籍（中国の古典）は遅くとも５世紀以前（大庭・王〈1996〉８頁）または６世紀初の頃（神田〈1987〉９頁）から日本に伝わり、奈良時代に入って大規模にもたらされるようになる。それ以降、江戸時代にいたるまでの長い間、種々の漢籍が日本に伝わっていた。劉（2013）では、室町時代における漢籍流布の状況を把握するため、内閣文庫蔵天文五（1536）年写『三体詩幻雲抄』（次節で紹介する。以下「当抄物」ともいう）を資料として、抄文中において引用された漢籍に注目して調査した。当抄物は、五山の僧侶三十余人による『唐三体詩』の所説を取り合わせた抄物で、実に多方面にわたって漢籍を大量に博引傍証しながら解釈している。その引用された漢籍の種類について、引用先の記し方から「書物」[注1]と「単一の詩文」の大きく二つに分類できる。たとえば、（１）と（２）は、戴叔倫「湘南即事」詩「盧橘花開楓葉衰　出門何處望京師　沅湘日夜東流去　不為愁人住少時」についての抄文である。（１）では一句目にある「盧橘」がどういうものかについて『韻語陽秋』を引いて解釈している。（２）では三句目と四句目の意味するところについて「鼎臠」（すなわち『詩家鼎臠』）を引いて解釈している。このように、引かれるその漢籍の書名[注2]である「韻語陽秋」や「鼎臠」は引用の内容（〜線部）の前[注3]に記しており、明らかにある書物から引いたと見える場合は、「書物」の類としている。

（１）韻語陽秋云　東坡賞枇杷詩　魏花非老伴　盧橘認郷人　又云　客来茶罷無有　盧橘楊梅尚帯酸　皆以盧橘為枇杷也［一四二１〜２］[注4]

（２）沅湘云々　以下二句　言沅湘日夜向東流去　故欲付吾愁　不少住也　杜詩　清渭無情極　愁時正向東　反用之也　又鼎臠　馮可迂所思詩云　雁自飛々水自流　西風不寄小銀鈎　意同也［一四四５〜６］

一方、これと違って、「単一の詩文」の類とは、作者名が記されているが、書物の名らしい表示[注5]は見当たらないという場合である。大きく三つのタイプに分ける。タイプⅠは「作者名＋篇目名＋引用の詩文」という体裁をとっている。たとえば、巻首の杜常「華清宮」詩「行尽江南数十程　暁乗残月入華清　朝元閣上西風急　都入長楊作雨聲」についての抄文を見ると、次の（３）では「華清宮」詩に関連のある東坡「驪山」詩を引いており、そこに「作者名（東坡）＋篇目名（驪山）＋引用の詩句（六竜〜華清院）」という体裁をとっている。また、（４）では「華清宮」詩に「有風字二　入字二」の理

由について北磵詩を引いており、そこに同じく「作者名（北磵）＋篇目名（辞州府啓）＋引用の詩文（謬将～之嘲）」という体裁をとっている。

（３）東坡驪山詩　六竜西幸峨眉棧　悲風便入華清院　又云　我上朝元春半老　満地落花無人掃　羯鼓楼高掛夕陽　長生殿古生青草［九二９］

（４）渊云注６　又此集為天下詩法　而壓巻之詩　有風字二　入字二　何哉　或云　暁風残月　謂女色也　北磵辞州府啓云　謬将槁木死灰之士　誣以暁風残月之嘲　盖北磵有不律虚名也［九五14］

タイプⅡは、篇目名も見えず、「作者名＋引用の詩文」という体裁をとっている。たとえば、四句目に見る「長楊」は何を指すかについて、（５）ではそれは「長楊樹」であって、「長楊殿」でないと解釈している。そこに、まず「厳子安和」注７から「和華清宮」詩を引いて、さらに、子安和詩の拠るところとして、「作者名（坡）＋引用の詩文（東隣～雨声急）」という体裁をとって東坡詩を引いている。また、（６）では、「長楊」は「亦指楊貴妃等歟」と解釈して、そこに同じく「作者名（虞伯生）＋引用の詩文（何処～雨声）という体裁をとって虞伯生詩を引いている。

（５）朝元云々　雪樵本云　二句言明皇惑方士左説　祈神仙長生之術　而無其應　却有西風動兵氣　与向之暁風　俱入宮前長楊　而作雨声也　長楊　天隠云　樹也　厳子安和　十八楼臺無処所　白楊風起作秋声　盖長楊非殿可視　然厳子句本于坡　東隣多白楊　夜作雨声急之語［九一21］

（６）長楊　趙瞻民義　虞伯生詩云　何処他年寄此生　山中江上捻関情　無端繞屋長松樹　尽取風声作雨声　世傳云　謗松氏執権者　盖擬杜常都入長楊作雨声之詩　則長楊亦指楊貴妃等歟［九四20］

タイプⅢは、「作者名＋篇目名」という体裁をとっており、実際の詩句の引用は見当たらない。たとえば、次のように、一、二句の意味するところについて、東坡の「驪山」を掲げている。そこに詩句を引いていないのは、その前の抄文中（前掲（３））においてすでにこの詩を引いたため、再び引かなくてもわかると抄者が考えたからかもしれない。

（７）村講　一二句ハ　両義也　杜常行尽蜀江之南数十里　暁乗残月之時　入華清ト云ニハ　用覚範十里之松之句　一義用坡驪山詩　言ハ　玄宗蜀江エ　落テ　萬里ノ蜀ヘ可行トテ　纔江南ノ数十里程ヲ　行キ過キ　タレハ　アトニ　アル華清ハ　暁乗残月カ　入テ　サヒサヒトシタル也［九四５］

実際、『三体詩幻雲抄』における「書物」の類の引用については、劉（2013）において、266種あり、計2060箇所が確認できており、さらに、四部における分布・注目されるジャンル・引用の頻度・現存しない漢籍の使用の４点から検討を加えた。「単一の詩文」の類については、同稿において言及しており、六朝・唐・宋・元・明と時代ごとに一覧にした（同稿附録４を参照）。その一覧表によれば、「単一の詩文」の類は作者90余人、合わせて290余箇所数える。そのうち、唐代は50余人で、150余箇所あり、およそ全体の半分を占めており、それに次ぐ宋代は20余人で、110余箇所あり、その他の時代のものは少数である。

「単一の詩文」の類のうち、実際にある書物から引用した可能性がないとは言えない。ただ、一方で、こうして引かれている詩文は、出処を記さなくてもよいほど、当時五山僧の間において広く流布していたであろうという捉え方もあり得よう。これら『三体詩幻雲抄』に散見している詩文について、調べて整理する必要があると考える。劉（2017）[注8]において、特に唐詩の引用状況について検討している。本稿では、それに引き続き、二番目に多い宋代の詩文、特に宋詩に注目して、当抄物における引用の状況を把握してみたい[注9]。具体的には、１節で、『三体詩幻雲抄』の成立をめぐる事情について概観する。２節で、本稿における調査の範囲及び調査の対象について述べる。３節で、当抄物全巻にわたり調査し、基本データを作成する。４節で、当抄物における宋詩の引用の状況についていくつかの点から観察する。最後に、本稿で明らかにしたことをまとめ、今後の課題について述べる。

１　『唐三体詩』、『唐三体詩』の抄物及び『三体詩幻雲抄』の関連情報について

『唐三体詩』諸本、『唐三体詩』の抄物及び『三体詩幻雲抄』の関連情報について、すでに劉（2009）・劉（2013）・劉（2015）において、坪井（1977）・谷澤（1977）・村上（1978）・陳（2010）を参照しながら、くりかえしてきた。以下、要点のみまとめる。

『三体詩幻雲抄』の注釈対象となる『唐三体詩』は、南宋の周弼によって編まれた唐詩選本である。『唐三体詩』は、いわゆる通称であり、諸本には「唐詩三体家法」「唐詩三体家法」「唐賢三体家法」「唐詩三体家法」などといった書名が見られる。中唐・晩唐の詩人167名の詩を収め、南宋1250年に成立した。原本は無注本であり、元の時に圓至天隠注本（20巻）・天隠注本を少し含むいわゆる裴季昌注本（３巻）・天隠注に季昌注を抜粋して加えたいわゆる増注本（３巻）の三系統の注本が作られた。この三系統の注本は、後に元刊本または明刊本として日本に伝わった。それにしたがって、五山僧の間でしだいに三体詩が広く愛読されるようになり、室町中期から江戸初期にかけて当時に最も広く流布していた増注本を対象に抄物が大量に作られていた。そのうち、『三体詩幻雲抄』を含め、重要なものは少なくとも18種ある。

本稿で用いる天文五年写本は、原本成立（1527年）後まもなく転写されたもので、現存する室町時代の古写本として貴重であるとされている。同書の書誌学的な情報はおおむね以下のとおりである。

成立の経緯：先人の三体詩の所説を五山僧の月舟寿桂（号は幻雲、1460～1533）が集成し、その弟子の継天寿戩が整理・補記して、大永七年（1527）に成った。

対象とする原典テキスト：『増註唐賢絶句三體詩法』[注10]すなわち「増注本」と称するもの。

内　容：原典の巻一に収めた七言絶句（174首）についての絶句抄。中に、詩人の履歴、用字用語や詩句、事物や地名、異文、誤植、更に作詩の規範や方法など実に多方面にわたった講釈が見られており、しかも、江西竜派、希世霊彦、桃源

瑞仙など著名な学僧30余人の所説を含んでおり、五山の三体詩解釈の集大成と認められている。

使用テキスト：中田祝夫編・抄物大系所収影印本『内閣文庫蔵天文五年写本　三体詩幻雲抄』（坪井美樹氏の解説を附す）。五冊からなり、抄文はテキストの47頁より約565頁ほど綴っている。

底　本：国立公文書館内閣文庫所蔵天文五年（1536）写「増註唐賢絶句三体詩法幻雲抄」、数人の手による転写本。

体　裁：原典の本文（詩題・詩人名・詩本文・天隠注・裴庾注の５項目）と抄文を併載。原典の本文は天地に余白を持つ方形の枠線内に書かれ、抄文は原典よりやや小さい小文字でその枠線の後にほぼ紙面いっぱいに書き込まれている。一部、枠線内や枠線外（つまりその四周）に書き込まれた抄文がある。

２　本稿における調査の範囲及び調査の対象

本稿では、抄文の部分（上記の「体裁」を参照）を調査の範囲にして、全巻にわたって調査する。

また、前に触れたように、「単一の詩文」の類は、タイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用の詩文」（前掲（３）（４））、タイプⅡ「作者名＋引用の詩文」（前掲（５）（６））とタイプⅢ「作者名＋篇目名」（前掲（７））の三つのタイプがある。本稿では、基本として、この三タイプのものを調査の対象としておく。

ただ、以下に述べるように、体裁上、以上の三タイプのいずれかに合っているが、実際にその作者の別集や注本、または、関係する総集や詩話の類から引かれており、「書物」の類と見ておくべき場合が十数箇所ある[注11]。これらは対象としない。

一つ目に、次の（８）「東坡＋泛頴＋我性〜河之湄」・（９）「山谷＋和常父丁卯雪＋近臣〜冕旒」とあるように、体裁上、タイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用の詩文」に合っている。しかし、実際、（８）については、その後に「須渓批云」（＿＿線を引いた）すなわち宋の劉辰翁の東坡批点を記しており、この部分は当時五山僧の間に伝わっている劉辰翁東坡批点本、または、劉辰翁東坡批点を収めるその他の書物から引用したと判断できる。同じように、（９）については、「任淵註」（＿＿線を引いた）すなわち宋の任淵の山谷詩注を掲げており、この部分は当時伝わっている任淵山谷詩注本、または、任淵山谷詩注を収めるその他の書物を引用したと判断できる。

（８）桃抄　或云　水雖帰海　我不帰故郷　故多感也　第二句　挙春与秋　而夏与冬　在其中也　渊云　東坡泛頴詩　我性喜臨水　得頴意甚奇　到官十日来　九日河之湄　云々　須渓批云　知之者得其哀愁　不知者以為豁達　此詩亦有此意　盖叔倫不遂功名之志　西東漂西泊　豈無感哉　又不能帰山中　故居荒廃　出処違心也者［一四〇６］（戴叔倫「贈殷亮」詩：傷春未已復悲秋）[注12]

（９）玉皃――或云　君王　玉皃也　山谷和常父丁卯雪詩云　近臣知天喜　玉色動冕

旒　玉色　言天子玉顔也　任淵註［四二六15］（劉得仁「舊旧人」詩：曾緣玉貌君王寵）

また、次の（10）「東坡＋快瀉銭塘薬王船」・（11）「坡＋空斎書静聞登々」のように、体裁上、タイプⅡ「作者名＋引用の詩文」に合っているが、その後に「注」・「注云」と記されており、東坡詩注または東坡詩注を収める書物から引用した可能性があり得ると考える。

（10）東坡　快瀉銭塘薬王船　注　坡以薬煮石　似玉　可作酒盃［三四四５］（杜牧「醉後題僧院」詩：觥船一掉百分空）

（11）樵本……登々　毛詩注云　尽力之意也　坡詩云　空斎書静聞登々　注云　打碑声也［五四五５］（盧綸「山店」詩：登々山路何時盡）

二つ目に、次の（12）「張亶＋天風～還家」のように、タイプⅡ「作者名＋引用の詩文」に合っているが、実際に「天風」から「未免近凡」まではすべて引用であり、宋胡仔『苕溪漁隠叢話前後集』（巻五十八）・宋魏慶之『詩人玉屑』（巻二十）・明蔣一葵『堯山堂外紀』（巻五十一）においてほぼ同文のものが確認できる。これらの書物から引用した可能性が十分あり得ると考える注13。

（12）案　宋　張亶詩云　天風吹散赤城霞　染出連雲万樹花　誤入醉郷迷去路　傍人應咲忘還家　有仙人曰　子詩佳絶　未免近凡［六〇四７］（高駢「君山」詩：日暮忘却巴陵道）

三つ目に、次の（13）「覚範＋十里之松」のように、体裁上、タイプⅢ「作者名＋引用の詩句」に合っている。しかし、文脈を遡ると、その前頁において、（14）のように「村云」の説が掲げており、そこに「石門文集」から「行尽湘西十里松　到門却立数諸峯」を引用しているところが確認できる。つまり、（13）では前出した引用を繰り返さないため、引用の詩句だけを略して記したのではないかと考えられ、これを「単一の詩文」の類としてでなく、「書物」の類として扱うべきだと判断できる。

（13）村講　一二句ハ　両義也　杜常行尽蜀江之南数十里　暁乗残月之時　入華清ト云ニハ　用覚範十里之松之句　一義用坡驪山詩　言ハ　玄宗蜀江エ　落テ　萬里ノ蜀ヘ可行トテ　纔江南ノ数十里程ヲ　行キ過キ　タレハ　アトニ　アル華清ハ　暁乗残月カ　入テ　サヒサヒトシタル也［九四５］（前掲（７）の再掲）

（14）幻本　村云　石門文集　有行尽湘西十里松　到門却立数諸峯之詩　則杜常入華清之義亦可也　雖然　風月入華清之義為優也［九三２］

以上述べてきたように、体裁上からみて、「単一の詩文」の類の三タイプのうちのいずれかであると見える例ではあるが、実際は「書物」の類に入れるべきであり、本稿の調査の対象からははずすこととする。

３　基本データの作成

以下、前節で述べた方針をもとに、『全宋詩』との相違を確認・整理して、基本データを作成する。

その際、検索の便を考えて、基本的に、引用される宋詩の作者名を見出し項目として、その五十音順により、引用の詩文の開始頁の順によって示す。なお、作者名は後掲の表１に見るとおり、『全宋詩』に載る作者の姓名に従うこととし、それを先に掲げ、その後の（　）内に当抄物における記し方を添える。なぜなら、作者名については、当抄物では、字や号または字・号の一部を使って記すほか、姓名または姓だけを使ったり当時五山僧の間で通用している呼び方を使ったりする場合もあり、一様ではないからである[注14]。

また、『全宋詩』において確認できた場合、まず、『全宋詩』における巻数と頁数を掲げる。抄文において詩題を記していない場合、または、詩題・詩句は『全宋詩』に相違する場合はそれぞれ示す。たとえば、表１の［５］については、「巻1442〈16633頁〉／「冬青」／常秋-常私／惆悵一枝嵐氣裡-寂寞一株嵐霧裏)」としたのは、「『全宋詩』における巻数〈頁数〉／『全宋詩』に記した詩題／当抄物に記した詩句－『全宋詩』に記した詩句」を意味する。一方、『全宋詩』において当該詩が確認できなければ、「『全宋詩』未見」と記す。

【表１】『三体詩幻雲抄』に引用された宋詩一覧

・欧陽修（欧陽公・欧陽・欧）

［１］樵本曰　恣風――乃折句法也　所謂三字四字　欧陽公詩　静愛竹時来野寺　独尋春偶過渓橋　又盧贄元雪詩云……［二五九６］（巻302〈3902頁〉／「退居述懐寄北京韓侍中二首」）

［２］杜牧……欧陽　自楊迂穎詩　都将二十四橋月　換得西湖十頃秋［二九五２］（巻293〈3690頁〉／「西湖戯作示同遊者」）

［３］樵本曰……又欧詩　捻将――　又東坡　二十四橋亦何有　換此十頃玻璃風　又山谷淮南云々　見于前　盖和月明記　曽遊之語　以彼数篇詩推之　則益有味者也［二九五14］（同前／捻将-都将）[注15]

［４］補云　聴雨点ニハ　應被百花撩乱咲　花カ撩乱トシテ　ヨリアツマリテ　應咲ソ……欧陽詩　山花撩乱鳥綿蛮　参寥詩　可是晩来風更悪　杏花撩乱撲回廊［四三三10］（巻283〈3609頁〉／「送姜秀才遊蘇州」）

・韓駒（韓子倉）

［５］韓子倉詩云　離宮見爾近天墀　雨露常秋養種時　惆悵一枝嵐氣裡　無人識是万年枝　意本于此句乎［二一二16］（巻1442〈16633頁〉／「冬青」／常秋-常私／惆悵-寂寞／一株-一枝／嵐氣-嵐霧）

・胡仔（漁隠）

［６］補云　聴雨点ニハ　應被百花撩乱咲　花カ撩乱トシテ　ヨリアツマリテ　應咲ソ……漁隠詩曰　日高春睡無人喚　撩乱梅花達夢飛　幻謂　此詩撩乱字或属人　或属咲字　不可也［四三三10］（巻2008／「題苕渓漁隠図」／梅花-楊花／達夢飛-繞夢飛）

・王安石（荊公）

［７］□□……荊公学之作詩　然不到其妙処　故為師門所誚也　云々　余未考其出処

也　荊公詩云　日落断橋人独立　水涵幽樹鳥相依［五五六４］（巻562〈6671頁〉／「太湖恬亭」）

［８］□□……荊公学之作詩　然不到其妙処　故為師門所誚也　云々　余未考其出処也　荊公詩云……晴日暖風生麦氣　緑陰幽草勝花時［五五六４］（巻564〈6688頁〉／「初夏即事」）

［９］□□……荊公学之作詩　然不到其妙処　故為師門所誚也　云々　余未考其出処也　荊公詩云……欲記荒寒無善画　頼傳悲壮有能琴［五五六５］（巻564〈6687頁〉／「秋雲」）

［10］旧抄　李洞曽愛此詩　書之壁間　以諷詠　洞死之後　人以為洞詩　誤矣　盖荊公　嬾緑枝頭紅一点　動人春色不須多之類也［六〇五10］（『全宋詩』未見）注16

・寇準

［11］冠準　春日登楼懐帰去　高楼聊引望　杳々一川平　野水無人渡　孤舟尽日横　荒相生断藹　古寺語流鶯　旧業遥清渭　沈思急自驚［五七六15］（巻90〈1001頁〉／「春日登楼懐帰」／野水-遠水／荒相-荒村／古寺-深樹／沈思-沉思／急自驚-忽自驚）

・黄庭堅（山谷）

［12］桃抄云　又詩法ニ　有十躰　一ニハ……第五　上四下三　是ハ　今作ルニ　尤宜　上四字ト　下三字ト　別ノ事ヲ　云テ　合シテ　句ヲ　作ルソ　金馬朝回門似水　碧鶏天遠路如年　如此作ルソ　又山谷詩　家徒四壁書侵座　馬瘦三山葉擁門　此モ　此躰ソ［八四９］（巻984〈11357頁〉／「次韻宋懋宗僦居甘泉坊雪後書懐」）

［13］杜牧……欧陽……山谷　寄王定國詩　淮南二十四橋月　馬上時々夢見之［二九五３］（巻985〈11368頁〉／「往歳過廣陵値早春嘗作詩云春風十里珠簾巻……今春有自淮南来者道揚州事戯以前韻寄王定國二首」其一）

［14］樵本曰……又東坡二十四橋亦何有　換此十頃玻璃風　又山谷　淮南云々　見于前　盖和月明記　曽遊之語　以彼数篇詩推之　則益有味者也［二九五14］（同前）注17

［15］樵本曰　長廊云々……此詩第二三句　亦言礼樂整頓也　山谷　題浄因壁詩云　履声如度薄氷過　催粥華鯨吼夜闌　亦同意［三〇八11］（巻989〈11390頁〉／「題浄因壁二首」其二）

［16］續翠云　之字　後人不可用之……山谷詩　山雌之弟竹雞兄　盖句法之一也［三二九13］（巻998〈11441頁〉／「戯詠零陵李宗古居士家馴鷓鴣二首」其一）

［17］東坡　快瀉銭塘薬王舩　注坡以薬煮石　似玉　可作酒盃　山谷詩　執玉酒明舩［三四四４］（巻996〈11428頁〉／「次韻廖明略同呉明府白雲亭宴集」）

［18］桃抄　舣舩――……カウ大酒ヲ　飲テ　遊タレコト　十歳ハカリ　ヨウタ時ハ　春ハ　吾ニハ　不負シ　モノヲト　思出ソ　山谷　青春負我堂々去　白髪欺人故々生ト　作タモ　此句カラ　出タソ［三四五１］（『全宋詩』未見）注18

［19］山谷又有書呈公悦詩云　庾公風流冷似鉄　誰其継之方公悦［三六八４］（巻996〈11429頁〉／「庭堅以去歳九月至鄂登南楼歎其制作之美成長句久欲寄遠因循至今書呈公悦」）

［20］淵云……去年マテハ　チカレタト思タ　今ハ　無汚ト　知ソ　見乱山得此理也

元来不動者　曲几石屏也　山谷詩　涼生只當処　暑退亦無方之処也［四二八12］（巻996〈11430頁〉／「和凉軒二首」其二）

［21］桃云　トチカネノ　座テ　アリサウナソ　山谷詩　石室無心骨　金鋪称意苔［四三五21］（巻992〈11408頁〉／「萬州下巖二首並序」其二）

［22］黙云　三四句与山谷　鬼門関外莫言遠　五十三驛是皇州之詩　有唐宋異　可着眼［五八九９］（巻990〈11394頁〉／「竹枝詞二首」其一）

［23］黙云　三四句与山谷　鬼門関外莫言遠　五十三驛是皇州之詩　有唐宋異　可着眼［五八九９］（巻990〈11394頁〉／「竹枝詞二首」其二）注19

・釋居簡（北磵）

［24］渊云　又此集為天下詩法　而壓巻之詩　有風字二　入字二　何哉　或云　暁風残月　謂女色也　北磵　辞州府啓云　謬将槁木死灰之士　誣以暁風残月之嘲　盖北磵有不律虚名也　然則暁風有情也　西風無情也　字雖重複　義則異也［九五14］（『全宋詩』未見）注20（前掲（５）の再掲）

・釋契嵩（嵩明教）

［25］補講　續翠云　饒ハ　人ノ物ヲ　賣買ニ　マケルヲ　饒ト云也……嵩明教詩　客去清談少　年高白髪饒［一七三19］（巻280〈3567頁〉／「自贈」／年高-年来）

・釋道潛（参寥）

［26］補云　聴雨点ニハ　應被百花撩乱咲　花カ撩乱トシテ　ヨリアツマリテ　應咲ソ……参寥詩　可是晩来風更悪　杏花撩乱撲回廊［四三三10］（巻915〈10748頁〉／「春詞」／撩乱-香乱）

・朱熹（朱元晦）

［27］朱元晦　山茶詩　江南池舘厭深紅　零落山烟山雨中　却是北人偏愛惜　数枝和雪上屏風［四一八17］（巻2393〈27665頁〉／山烟-荒煙）

・徐似道（徐淵子）

［28］徐淵子詩　客路三千身半白　對人猶自説帰耕［四〇二16］（巻2519〈29106頁〉「自笑」／身半白-年五十／自説-説是）

・蘇軾（東坡・坡）

［29］朝元云々　雪樵本云　二句言明皇惑方士左説　祈神仙長生之術　而無其應　却有西風動兵氣　与向之暁風　俱入宮前長楊　而作雨声也　長楊　天隠云　樹也　厳子安和　十八楼臺無処所　白楊風起作秋声　盖長楊非殿可視　然厳子句本于坡　東隣多白楊　夜作雨声急之語［九一22］（巻786〈9113頁〉／「次韻子由岐下詩並引」〈凡21首〉其四）（前掲（５）の再掲）

［30］東坡　驪山詩　六竜西幸峨眉棧　悲風便入華清院　又云　我上朝元春半老　満地落花無人掃　羯鼓楼高掛夕陽　長生殿古生青草［九二９］（巻1202〈13612頁〉／李鴈／「驪山歌」／無人掃-人不掃）（前掲（３）の再掲）

［31］村講　一二句ハ　両義也　杜常行尽蜀江之南数十里　暁乗残月之時　入華清ト云ニハ　用覚範十里之松之句　一義用坡驪山詩　言ハ　玄宗蜀江エ　落テ　萬

里ノ蜀ヘ可行トテ　纔江南ノ数十里程ヲ　行キ過キ　タレハ［九四５］（同前）（前掲（７）の再掲）

［32］東坡驪山詩　我上朝元春半老　満地落花無人掃［九六11］（同前）

［33］雪本　清明詩　清明時節雨紛々　路上行人欲断魂　借問酒家何処有　牧童遥指杏花村　潘湖隠孤山喚渡詩　吟傍蘇堤欲暮天　孤山影裡喚帰舩　旁人問我詩成未　思在断橋烟柳辺　東坡乞會稽詩　乞郡三章字半斜　庶堂伝咲眼昏花　上人問我遅留意　待賜頭綱八餅茶　又南来北去幾時帰……［一一七11］（巻819〈9485頁〉／「七年九月自廣陵召還復館於浴室東堂八年六月乞會稽将去汶公乞詩乃復用前韻三首」其一）

［34］雪本　清明詩　清明時節雨紛々　路上行人欲断魂　借問酒家何処有　牧童遥指杏花村　潘湖隠孤山喚渡詩　吟傍蘇堤欲暮天　孤山影裡喚帰舩　旁人問我詩成未　思在断橋烟柳辺　東坡乞會稽詩　乞郡三章字半斜……又南来北去幾時帰　倦鳥孤雲豈有期　断送一生消底物　三年光景六篇詩［一一七12］（同前／其三／南来北去-東南此去）

［35］盧橘　桃云　盧橘二説也　盧橘ノハナ　タチハナト　文選ニ読也　上林賦　盧橘熟ト云テ　其末ニ　枇杷樣柿ト　アルホトニ　枇杷テハナイハナ　タチハナ花也　盧字ハ　何ソ　橘ノ　冬実ノナツタニ　覆ヲシテ　ヲケハ　次ノ年ノ春夏マテ　アツテ　色カ　変シテ　青黒ニナルソ　青黒ノ色ヲ　盧ト云ソ　故ニ　東坡モ　白梅盧橘覚猶香　ト白ニ盧ヲ　對也　養謂　サレトモ　季昌注即枇杷也ト云ソ［一四一４］（同前／其二）

［36］東坡寄宝麐云　満園秋色濃欲滴　老僧倚杖青松側　何事高声喚不應　嗔余蹈破蒼苔色［一三二10］（巻54〈591頁〉／釋宝麐／「題逆旅壁」／秋色-秋光／何事-只怪／喚不應-問不應／嗔余-瞋余／蹈破-踏破）注21

［37］雪本　盧橘――以下二句　言我謫湘南未得昵　故日々出門以望京師也　第一句言時節也　銭起辛夷花尽杏花飛　東坡　木綿花落刺桐開　誠斎　老子今朝偶然出　李花全落杏花開之類［一四四４］（巻825〈9555頁〉／「海南人不作寒食而以上巳上冢予携一瓢酒尋諸生皆出矣獨老符秀才在因與飲至醉符蓋儋人之安貧守静者也」）

［38］或云　詩人多用強字　杜詩卧病一-秋強　又云　四松始栽時　大-抵三-尺強　又云　一夜水高二尺強　東坡詩　贏得児童語音好　一年強半在城中［一七〇１］（巻792〈9173頁〉／「山村五絶」其四）

［39］東坡カ　白髪年来漸不公ト　作タ　是モ　亦翻案ノ法也［一七四11］（巻792〈9167頁〉／「和邵同年戯贈賈収秀才三首」其一）

［40］幻謂　未必如此乎　用仙家故事　美天子是常事也　東坡詩　侍臣鵠立通明殿　一朶紅雲捧玉皇　盖指哲宗也　何曽譏之哉［一八七４］（巻819〈9481頁〉／「上元侍飲樓上三首呈同列」其一）

［41］補云　新豊ハ　高祖ノ事ナレトモ　武帝ト其相近者ホトニ　漢ト云ワン為メニ用タソ　第二句ハ……又東坡一朶紅雲捧玉皇之意也［四一一２］（同前）

［42］村講云　夜深――或曰……此詩只言老禅方丈寂寥之皃　杜詩　蛍入定僧衣　坡

詩　只見孤蛍自開闔之類［二二〇12］（巻806〈9339頁〉／「自興国往筠宿石田駅南二十五里野人舎」／只見-惟有）

［43］補云　此詩有三義也　一二句言此僧無心　三四句言此僧謂到無心地　猶被小乗縛也　猶字　抑下之意也　東坡贈道潛詩　猶嫌剃髪有詩斑之意也　言已無心則何必隔朝市山林也［二八三15］（巻806〈9342頁〉／「次韻道潛留別」／猶嫌-尚嫌）

［44］補云　此詩有三義也　一二句言此僧無心　三四句言此僧謂到無心地　猶被小乗縛也　猶字　抑下之意也　東坡贈道潛詩　猶嫌剃髪有詩斑之意也　言已無心則何必隔朝市山林也　已喜禅心無別語　猶嫌剃髪有詩斑　詩斑トハ　為作詩若而髪白也［二八三16］（同前）

［45］又按　南史　刘道産為襄陽太守　善于臨職　蛮夷　服順　百姓楽業　由此有襄陽楽歌云　坡詩　使君未来襄陽愁　提戈入市裹毡裘　南渡沔　襄陽無事多春遊　襄陽春遊楽何許　峴山之陽漢江浦　使君朱旆来翻々　人道使君似羊杜　道辺逢人問洛陽　中原苦戦春田荒　北人聞道襄陽楽　目送徴鴻應断腸［二九二２］（巻785〈9100頁〉／「襄陽古樂府三首」其三「襄陽樂」）／徴鴻-飛鴻／南渡沔-自従氈裘南渡沔）

［46］樵本曰……又案　韓詩　敦臨眇空濶　緑浄不可唾　又　坡詩　秋風巻黄落　朝雨洗緑浄［二九二７］（巻828〈9579頁〉／「余昔過嶺而南題詩龍泉鐘上今復過而北次前韻」）

［47］樵本曰……又欧詩　捻将――（見于前）　又東坡二十四橋亦何有　換此十頃玻璃風　又山谷淮南云々　見于前　盖和月明記　曽遊之語　以彼数篇詩推之　則益有味者也［二九五15］（巻818〈9465頁〉／「軾在潁州與趙徳麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成徳麟有詩見懐次其韻」）

［48］黙云　破額山字　含無限意也　山名破額　則其境不佳者　不言而可知耳　東坡山想喜懽労遠夢　地名惶恐泣孤臣之類也［三〇三４］（巻821〈9500頁〉／「八月七日初入贛過惶恐灘」／山想-山憶）

［49］樵本曰　坡又曰　楚境横天下　懐王信弱兵［三〇四８］（巻785〈9098頁〉／「荊州十首」其十／弱兵-弱王）

［50］或云　送客愁　客愁　送来也　東坡詩　短日送寒碪杵急之送字也［三〇六８］（巻787〈9116頁〉／「九月二十日微雪懐子由二首」其一）

［51］東坡次韻銭穆父紫薇花詩　虚白堂前合抱花　秋風落日照横斜［三〇九６］（巻815〈9431頁〉／「次韻銭穆父紫薇花二首」其一）

［52］送魏十六　十六　桃云　如此之類　不可勝計……日本テモ　子多人ハ　四十五人アルソ　東坡二丈　黄門三丈ハ　能合タソ　坡詩ニ　瞻前惟兄三　顧後子由一ト　作タハ　チカウタソ　兄カ三人アリト　見ヘタカ　蘇二ト云ハ　不審ナソ［三二一３］（巻804〈9314頁〉／「冬至日贈安節」）

［53］幻謂　坡詩　慈湖峡阻風云　猶有小舩来賣餅　喜聞墟落在山前　詩意類焉［三四一９］（巻820〈9497頁〉／「慈湖峡阻風五首」其二）

［54］罷約――樵本云　不繋舩之三字　成全篇也……坡慈湖峡阻風詩云　捍索桅竿立嘯空　篙師酣寝浪花中　故應菅蒯知心腹　弱纜能争万里風　意相似［四一四15］

（同前／其一／菅蒯-営蒯）

［55］桃云　行過――東坡石鼻城詩　北客初来試新険　蜀人従此送残山　独穿明月朦朧裏　愁渡奔河蒼茫間　漸入西南風景変　道辺修竹水潺々ト作モ　詩意相似ソ　此モ　トチカラソ　蜀人入ル路也［三四一10］（巻786〈9113頁〉／明月-暗月）

［56］東坡詩　江山豈不好　独遊情易闌［三九一（欄内）］（巻790〈9149頁〉／「甘露寺」）

［57］猶頭――仁宗時……牡丹自是宮中不戴珠　々價大減　東坡詩　人老簪花不自羞　花應羞上老人頭［四二六20］（巻790〈9152頁〉／「吉祥寺賞牡丹」）

［58］白髪云々　二句言宮人自不解老至而猶□□花以挿之也　坡云　人先簪花不自羞　花應羞上老人頭　本于□歟［四二六21］（同前）

［59］華陽云々　樵本　礼　二十成人　士冠　庶人巾　釈名　巾　謹也……坡詩　半昇僅漉淵明酒　二寸纔容子夏冠［四四九17］（巻804〈9319頁〉／「謝陳季常惠一掊巾」）

［60］旧抄云　日三竿　未詳……　東坡詩　酒醒門外三竿日　此詩言海國霧深不速晴　日出三竿之後　始弄晴也［四六四15］（巻809〈9366頁〉／「渓前堂」）

［61］注　賓退録――桃云　斉己ハ　去声ニ用ルソ……東坡ハ　多ク平声ニ　用タソ　簿書叢裏過春風　酒聖時々且復中トモ作　時復中之徐邈聖ト　作タニハ　声ハ不見　前句ニハ韻ニ踏タソ　其類不一也［四八二18］（巻799〈9251頁〉／「夜飲次韻畢推官」）

［62］注　賓退録――桃云　斉己ハ　去声ニ用ルソ……東坡ハ　多ク平声ニ　用タソ　簿書叢裏過春風　酒聖時々且復中トモ作　時復中之徐邈聖ト　作タニハ　声ハ不見　前句ニハ韻ニ踏タソ　其類不一也［四八二18］（巻791〈9168頁〉／「贈孫莘老七絶」其六）

［63］唐李廓下第詩　氣味如中酒　情懐似別人　東坡詩　落第汝為中酒味　斉己　楊柳詞云……［四八二18］（巻804〈9313頁〉／「姪安節遠来夜坐三首」其三）

［64］杜詩　暗水流花径　春星帯草堂　東坡詩　床下雪霜侵戸月　枕中琴筑落階泉［五四六17］（巻793〈9180頁〉／「立秋日祷雨宿霊隠寺同周徐二令」）

［65］瀲灩――文選注　瀲灩相連也　或曰　水満皃也　又曰　日光映水也　東坡詩　水光瀲灩晴偏好　言晴日映水也［五八九６］（巻792〈9172頁〉／「飲湖上初晴後雨」／偏好-方好）

・戴復古（戴石屏）

［66］有一軒号石竹院　竹院雖存竹已荒　数声啼鳥話凄涼　戴石屏［四七四３］（『全宋詩』未見）注22

・張舜民（張芸叟）

［67］煬帝――……張芸叟　長安覧古詩　沉香亭畔千株石　散与人家作假山［二三六９］（『全宋詩』未見）注23

［68］雪本曰　柳塘云々二句……張芸叟　長安覧古詩　黄鵠高飛去不還　百年世事奕碁間　沉香亭――作假山詩意惟同也［二三六13］（同前。『全宋詩』未見）注24

・沈括（沈存中）

［69］沈存中詩　住山人少説山多　空只年々思薜蘿　不是自心應不信　眼前帰計又蹉跎［四〇二17］（巻686〈8016頁〉／「歸計」／思薜蘿-憶薜蘿）

・陳師道（陳後山）

［70］村後講云　上人居廬山　三四句　言無限離恨　皆消尽也　寄僧詩　成空字　面白也　後山詩　相見又無事　不来還憶君之意也［四七二７］（巻2091〈23586頁〉／「釋咸傑」／「偈頌六十五首」其八）注25

・陳與義（簡斎）

［71］村云　三句不置日字　而有日斜之意也　韓詩……簡斎詩　盍簪共結鶏豚社　一咲相従万事休［三一四13］（巻1733〈19477頁〉／「若拙弟説汝州可居己卜約一丘用韻寄元東」）

・鄭碩

［72］樵本曰　鄭碩　梅詩云　紛々蜂蝶莫教知　竹外梅花一両枝　待得枝頭春爛熳　便如詩到晩唐時［三五〇16］（巻2839〈33806頁〉／「早梅」／梅花-疏梅）

・方岳（方秋崖）

［73］今周伯弼集此詩之大意　宋南渡以後　詩道寖変　近於誹諧　雖如楊誠斎方秋崖者　皆承其弊也　秋崖　秋日作云　秋日尋詩独自行　藕花香冷水風清　一凉轉覚詩難作　付与梧桐夜雨声　又漁父詩……雪本［八三13］（巻3194〈38286頁〉／「立秋」）

［74］今周伯弼集此詩之大意　宋南渡以後　詩道寖変　近於誹諧　雖如楊誠斎方秋崖者　皆承其弊也　秋崖　秋日作云　秋日尋詩独自行……又漁父詩　沽酒皈来雪満舩　一簑撑傍断磯邊　誰家庭院無梅看　不似江村欲暮天　雪本［八三14］（巻3194〈38286頁〉／「漁父詞」）

［75］方秋崖　山樊花詩　只有江梅合是兄　水仙終似號夫人　季芳政爾難為弟　毎恨詩評未逼真［五三三20］（巻3193〈38382頁〉／「山樊」）

・葉元素（葉苔磯）

［76］幻謂　女ノ心中ハ　謂忙众中ニテ　不語シテ　語ヲモ　不思ノカヲヽスルホト閑ニ　採蘋也　葉苔磯閨怨詩　長安遊子誤帰期　懶織回文錦時詩　約臂黄金寛一寸　逢人猶道不相思　意類之［二五一19］（『全宋詩』未見）注26

・葉紹翁

［77］葉紹翁詩　應嫌屐歯印蒼苔　十度敲門九不開　春色満園関不得　一枝紅杏出墻来［一三二９］（巻2549〈35135頁〉／「游園不値」／十度敲門-小扣柴門／不得-不住）

・楊万里（楊誠斎）

［78］誠斎　秋詩云　一疊青松一疊烟　横舗平野有無間　真成万丈鵝渓絹　畫出江西秋暁山　又凝露堂木犀詩云……聊欲革此弊　編此集［八三16］（巻2300〈26420頁〉／「煙林暁望二首」其一）

［79］誠斎　秋詩云……又凝露堂木犀詩云　夢騎白鳳上青空　径度銀河入月宮　身在廣寒香世界　覚来簾外木犀風　聊欲革此弊　編此集［八三16］（巻2284〈26202頁〉／「凝露堂木犀二首」其二）

［80］誠斎詩云　老子今朝偶然出　李花全落杏花開之法也［一四三８］（『全宋詩』未見）

［81］雪本　盧橘――以下二句　言我謫湘南未得昨　故日々出門以望京師也　第一句言時節也　銭起辛夷花尽杏花飛　東坡　木綿花落刺桐開　誠斎　老子今朝偶然出　李花全落杏花開之類［一四四４］（同前。『全宋詩』未見）

［82］楊誠斎　三月晦日詩　春光九十更三旬　暗準三旬賺殺人　未到暁鐘君莫喜　暮鐘声裏已無春［三六七４］（巻2309〈26554頁〉）

［83］楊誠斎詩　咲憶唐人句　無晴還有情　夕陽白鴎影　疎雨子規声［四一八18］（巻2276〈26089頁〉／「初夏日出且雨」／夕陽-斜陽）

［84］樵本　華陽巾……誠斎詩　蓮華頭巾道様裁　与所謂華陽巾亦可類知也［四四八16］（巻2315〈26634頁〉／「初夏即事十二解」其一／蓮華-蓮葉）

［85］誠斎　榕樹詩　直不為楹圜不輪　斧斤亦復赦渠薪　数株連碧真為菌　一脛空肥捻是筋［五八四４］（巻2291〈26307頁〉）

・李新（李元應）

［86］樵本　用事者……李元應詩 西斎睡起云　避雨燕児晴又去　趂衛蜂子晩還帰　西軒一枕無人喚　零落桃花遶夢飛［四九九６］（巻1261〈14223頁〉／趂衛-趂衙）

・陸游（陸放翁）

［87］陸放翁　三峽歌云　十二巫山見九峯　舩頭彩翠満秋空　朝雲暮雨渾虚語　一夜猿啼明月中［一五二17］（『全宋詩』未見）

［88］幻謂　放翁云　不許今年頭不白　城楼残角寺楼鐘［二四二１］（巻2164〈24484頁〉／「建安遣興六首」其一）

［89］聴雨講　見飛花可愁也……放翁　采蓮詩　風鬟霧鬢帰来晩　忘却荷花記得愁　盖自此詩出歟［三六九１］（巻2164〈24489頁〉／「采蓮三首」其二）

・林逋（林和靖）

［90］暁日――……林和靖詩　草泥行郭索　雲木響鈎輈　此両句双声也　郭索　入声　鈎輈　尤俟幽也［一九六８］（巻108〈1245頁〉／「句」／響-叫／鈎輈-鈎輈）

［91］樵本　用事者　唐人所詠者　稀矣　到宋人　則用事　叙事而已　雖然学唐躰者有是等作　林和靖詩云　神鋒雖缺力終存　架琢珊瑚欠策勲　日暮閑窓何所似　灞陵憔悴故将軍［四九九３］（巻108〈1235頁〉／「予頃得宛陵葛生所茹筆十餘筒其中復得精妙者二三焉……以録其功」）

・盧贄元

［92］樵本曰　恣風――乃折句法也　所謂三字四字　欧陽公詩……又盧贄元雪詩云　想行客過梅橋滑　兎老農憂麦隴乾［二五九７］（『全宋詩』未見）注27

以上のように、『三体詩幻雲抄』における宋詩の引用について調べた結果、蘇軾、黄庭堅、楊万里ら26人の詩83首（異なりの詩数）を見出すことができ、あわせて92箇所にもわたっている注28。これで、ひとまず、基本データが整ったと思う。

4　宋詩の引用状況

以下、前の表１「『三体詩幻雲抄』に引用された宋詩一覧」をもとに、宋詩の引用状況について、いくつかの点から考察してみる。

①漢文抄と仮名抄のどちらに現れるか

『三体詩幻雲抄』は、文体から見て、いわゆる漢文抄（すなわち漢字で書かれた抄文）と仮名抄（すなわち漢字仮名まじりで書かれた抄文）の両方を含む。たとえば、(15)では、張喬「寄維楊故人」詩の三、四句目「月明記得相尋處　城鎖東風十五橋」について、漢文で綴った抄文において、「杜牧」・「欧陽」・「山谷」の詩文を引きながら「盖楊州橋上宜賞月也　故和月以記曰遊也」と解釈している。一方、(16) は仮名抄である。皇甫冉「送魏十六」詩の詩題にある「十六」について、やや口語的な表現で綴った抄文でわかりやすく解釈しており、そこに「坡詩」の引用が見られている。

(15) 杜牧　寄楊州韓綽判官詩　二十四橋明月夜　玉人何処学吹簫　欧陽　自楊迂穎詩　都将二十四橋月　換得西湖十頃秋　山谷　寄王定國詩　淮南二十四橋月　馬上時々夢見之　盖楊州橋上宜賞月也　故和月以記曰遊也　補云　第二句　有玉人字　第四句　有十五橋字　盖本於杜牧寄韓判官詩也　又城鎖東風之点也［二九五２～４］（前掲表１の［２］欧陽修詩及び［13］黄庭堅詩の引用が入っている）

(16) 送魏十六　十六　桃云　如此之類　不可勝計　唐土ニハ　朝夕ニ云事ナルホトニ　不審ナイソ……日本テモ　子多人ハ　四十五人アルソ　東坡二丈　黄門三丈ハ　能合タソ　坡詩ニ　瞻前惟兄三　顧後子由一ト　作タハ　チカウタソ　兄カ三人アリト　見ヘタカ　蘇二ト云ハ　不審ナソ［三二一３］（巻804〈9314頁〉／「冬至日贈安節」）（前掲表１の［50］蘇軾詩の引用が入っている）

92箇所ある引用のうち、実際、仮名の抄文中に現れているのは、表１に掲げる［12］［18］［21］［25］［26］［31］［35］［39］［41］［52］［55］［61］［62］に見える13箇所のみである。残り79箇所はすべて漢文抄に見える。つまり、宋詩の引用は、漢文抄に集中しているということがわかる。

②「単一の詩文」の類の三タイプのうち、どのタイプに多いか

表２に示したとおり、当抄物に見られる83首、計92箇所引用あるうち、タイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用の詩文」が33箇所（30首）あり、タイプⅡ「作者名＋引用の詩文」が58箇所（55首）あり、タイプⅢ「作者名＋篇目名」が１箇所（１首）ある。つまり、タイプⅡはほぼ三分の二ほどで、最も多く、タイプⅠは二番目に多く、三分の一である。タイプⅢはわずか一つだけである。つまり、宋詩の引用の際、「篇目名」を掲げないのはより一般的のようである。

【表２】タイプごとに見る宋詩の箇所数及び詩数

	タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ	合計
箇所数	33箇所	58箇所	１箇所	92箇所
詩　数	30首	55首	１首	86首[注29]

③作者によって引用の箇所数に多寡が見られるか

次の表に一覧したようにまとめたように、作者によって引用の箇所数に多寡が見られる。

【表３】作者別に見る引用の箇所数及び引用の詩数[注30]

箇所数	作者及び詩数
37	蘇軾32
12	黄庭堅11
8	楊万里７
4	王安石４、欧陽修３　＜計７首＞
3	方岳３、陸游３　＜計６首＞
2	林逋２、張舜民１　＜計３首＞
1	韓駒、胡仔、寇準、釋居簡、釋契嵩、釋道潛、朱熹、徐似道、戴復古、沈括、陳師道、陳與義、鄭碩、葉元素、葉紹翁、李新、盧贄元　＜計17首＞

上の表でわかるように、蘇軾の詩は、32首引かれており、37箇所も数える。次いで、黄庭堅（11首・12箇所）、楊万里（７首・８箇所）、王安石（４首・４箇所）、欧陽修（３首・４箇所）、方岳（３首・３箇所）、陸游（同）、林逋（２首・２箇所）、張舜民（１首・２箇所）の順となっている。その他、韓駒、胡仔ら17人については、みな１箇所で、１首引かれている。つまり、蘇軾詩の引用は群を抜いて最も多く、全体の詩数（83首）と箇所数（92箇所）の五分の二ほど占めている。その次に多いのは黄庭堅詩（11首・12箇所）である。その他は、みな少ないほうである。

④『全唐詩』に確認されるか否か、また、どのような異同が見られるか

『三体詩幻雲抄』に引用された宋詩83首（92箇所）中、９首（11箇所）は『全宋詩』に確認できない[注31]。その他74首（81箇所）について、『全宋詩』に見られる。また、この81箇所についてタイプごとに見ると、タイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用内容」は27箇所あり、タイプⅡ「作者名＋引用内容」は53箇所あり、タイプⅢ「作者名＋篇目名」は１箇所ある[注32]。では、「作者名」・「篇目名」・「引用内容」において、『全宋詩』とどのように異なっているかを次の表にその概要をまとめる。

【表４】当抄物と『全宋詩』との相違の概要

タイプ	作者名	篇目名	引用の詩文[注33]
Ⅰ作者名＋篇目名＋引用の詩文	［30］［32］［36］	［36］［72］［73］［78］	一箇所：［27］［30］［32］［34］［43］［44］［54］［55］［72］［86］ 五箇所：［11］［36］　＜計10首、20箇所＞

Ⅱ作者名＋引用の詩文	［70］	—	一箇所：［３］［25］［26］［42］［48］［49］［65］［69］［83］［84］ 二箇所：［６］［28］［45］［77］［90］ 四箇所：［５］　　＜計16首、24箇所＞
Ⅲ作者名＋篇目名	［31］	0	—

上の表でわかるように、「作者名」については、当抄物は『全宋詩』に一致しないもの（同一の人物でない）が、三つタイプにそれぞれ１首あり、あわせて３首ある。そのうち、［30］に掲げる「驪山」詩（［31］と［32］はこれと同一の詩）については、当抄物では「東坡」・「坡」とし、『全宋詩』では李廌（巻1202）の作としている。［36］に掲げる「寄宝麿」詩については、当抄物では「東坡」とし、『全宋詩』では釋宝麿（巻54）の作としている。また、［70］に掲げる「後山」詩については、『全宋詩』では釋咸傑（巻2091）の作としている。

「篇目名」については、当抄物は『全宋詩』に一致しない（同一の篇目でない）のが、タイプⅠの［36］［72］［73］［78］の４首ある。当抄物では、それぞれ「寄宝麿」「梅」「秋日」「秋」と記しているのに対して、『全宋詩』ではそれぞれ「題逆旅壁」「早梅」「立秋」「煙林暁望」と記している。なお、［19］について「書呈公悦」（当抄物）と「庭堅以去歳九月至鄂登南楼歎其制作之美成長句久欲寄遠因循至今書呈公悦」（『全宋詩』）のように、当抄物では略した形で記していると考えられる場合[注34]は、今回は一致しないと認めない。

「引用の詩文」については、当抄物は『全宋詩』に一致しないところが、タイプⅠ（計10首、20箇所）とタイプⅡ（計16首、24箇所）の計26首に見られ、44箇所数える。具体的に、どのように相違するかを調べると、表５に示すように、およそ三種の相違が確認できる。一つ目は、「嗔余（当抄物）-瞋余（『全宋詩』）」や「蓮華（当抄物）-蓮葉（「全宋詩」）」などに見るように、単に誤記か誤読だろうと考えられる場合で、６箇所ある。これらは字形（嗔と瞋、華と葉）が著しく類似しているためだろう。二つ目は、「南渡沔（当抄物）-自従氈裘南渡沔（『全宋詩』）」のように、文字が脱落しているという場合で、１箇所だけである。三つ目は、異文として考えられる場合で、37箇所見られる。中には、「捻将-都将」「達夢飛-繞夢飛」のように、一字だけ相違する場合（26箇所）もあれば、「惆悵-寂寞」「古寺-深樹」「身半白-年五十」のように、語句全体が相違する場合（11箇所）もある。もちろん、中には断定しきれない箇所がある。たとえば、「蓮華-蓮葉」については、字形上の類似性により誤読したと判断したが、異文である可能性がないとは言い切れない。「常秋-常私」については、異文と判断したが、誤記や誤読の可能性があり得ないわけでもない。本稿では、以上のように、問題の所在を指摘するにとどめ、本文の校訂については、また各種の資料を調べたうえ別稿で検討する。また、そういった相違は、引用先の漢籍において存在したものなのか、抄物の作者が引用する際に誤ったものなのか、現段階では明らかにすることができない。今後の課題としたい。

【表５】「引用の詩文」の行文上に見る当抄物と『全宋詩』との相違

相違の種類	相違するところ
誤記か誤読 （６箇所、５首）	［36］嗔余-瞋余／蹈破-踏破、［54］菅蒯-営蒯、［84］蓮蘖-蓮葉、［86］趂衛-趂衙、［90］鈎輈-鉤輈
文字の誤脱 （１箇所）	［45］南渡沔-自従氈裘南渡
異文 （37箇所、23首）	一字だけ相違する場合：26箇所・18首 ［３］捻将-都将、［５］常秋-常私／一株-一枝／嵐氣-嵐霧、［６］梅花-楊花／達夢飛-繞夢飛、［11］野水-遠水／荒相-荒村／沈思-沉思／急自驚-忽自驚、［25］年高-年来、［26］撩乱-香乱、［27］山烟-荒煙、［36］秋色-秋光／喚不應-問不應、［43］［44］猶嫌-尚嫌、［45］徴鴻-飛鴻、［48］山想-山憶、［49］弱兵-弱王、［55］明月-暗月、［65］偏好-方好、［69］思薜蘿-憶薜蘿、［77］不得-不住、［83］夕陽-斜陽、［90］響-叫 語句全体が相違する場合：11箇所・９首 ［５］惆悵-寂寞、［11］古寺-深樹、［28］身半白-年五十／自説-説是、［30］［32］無人掃-人不掃、［34］南来北去-東南此去、［36］何事-只怪、［42］只見-惟有、［72］梅花-疏梅、［77］十度敲門-小扣柴門

つまり、『三体詩幻雲抄』に引用された宋詩について、ほどんど（83首中74首）が『全宋詩』で確認できる。また、『全宋詩』に比較して見ると、「作者名」と「篇目名」については、それぞれ３首と４首以外はすべて『全宋詩』に一致している。一方、「引用の詩文」については、74首中26首において、異文（37箇所、23首）をはじめ、誤記か誤読（６箇所、５首）・文字の脱落（１箇所）など、あわせて44箇所にわたって『全宋詩』に相違している。

以上のように、前節にまとめた基本データをもとに、①漢文抄と仮名抄のどちらに現れるか、②「単一の詩文」の類の三タイプのうち、どのタイプに多いか、③作者によって引用の箇所数に多寡が見られるか、④『全宋詩』に確認されるか否か、また、どのような異同が見られるか、の四点から、『三体詩幻雲抄』における宋詩の引用の状況について考察してきた。

５　まとめと課題

本稿では、『三体詩幻雲抄』に散見している宋詩について調べた結果、あわせて92箇所にもわたって、26人の83首（異なりの詩数）を見出すことができた。これを基本データにして、当抄物における宋詩の引用状況についていくつかの点から考察してみた。現段階においてわかったことについて、以下の四点にまとめられる。すなわち、一つ目に、当抄物において、宋詩の引用は仮名抄より漢文抄（92箇所中79箇所）に集中している。二つ目に、宋詩の引用に際して、三タイプの体裁をとっており、タイプⅡ「作者名＋引用の詩文」（55首・58箇所）はタイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用の詩文」（30首・33箇所）とタイプⅢ「作者名＋篇目名」（１箇所）を抜いて圧倒的に多く、「篇目名」を掲げずに

引用するのはより一般的のようである。三つ目に、作者（26人）によって詩数の多寡があり、うち蘇軾詩（32首・37箇所）は全体の五分の二ほど占め、最も多く、その他はみな少数のみである（11首・12箇所かそれ以下）。四つ目に、引用された宋詩はほとんど（83首中74首）が『全宋詩』に確認でき、うち「作者名」と「篇目名」についてはそれぞれ３首と４首以外はすべて『全宋詩』に一致している一方で、「引用の詩文」については異文（37箇所・23首）をはじめ、誤記か誤読（６箇所・５首）や文字の脱落（１箇所）が見られており、あわせて26首と44箇所にわたって『全宋詩』に相違している。

本稿の検討結果は、まず、宋詩の本文校訂、または、異文や逸詩の蒐集のための素材となると考える。特に、少数だが、『全宋詩』に確認できない詩（９首）があり、また、誤記や誤植、異文の可能性がある箇所が少なくないといったような点に『三体詩幻雲抄』の資料的な価値を見出すことができるだろう。現段階では、その詳しい事情を明らかにすることができないが、今後、この結果を手がかりにして、一つ一つについて追求していきたい。一方、本稿の検討結果は室町時代における宋詩の流布の状況を知るための基本データとしても用いられる。これら92箇所にもわたって宋詩を引いているが、それぞれは何のために用いられているかを精密に検討する必要があろう。また、本稿の冒頭で、これらはおそらく当時五山僧の間において広く流布しているだろうと述べたが、どのような経緯で広く知られるようになったかを探っていく必要もあろう。以上を含めて、今後の課題としたい。

注

1　劉（2013）では、「書物」の類という呼び方でなく、「著作集」の類と言っている。

2　書名については、通称のほかに、当時五山の僧侶の間に通用しているだろう略称も使われている。たとえば、後掲（１）（２）「鼎鬱」は「詩家鼎鬱」の略称である。なお、書名の記し方について、詳細は劉（2013）「3-2　本稿の研究対象とその様相」を参照されたい。

3　その書名はたいてい引用の内容の前に置かれているが、若干、引用の内容の後に置かれている場合もある。たとえば、「晁元忠西畈詩云　水從楼前来　中有美人淚　韓子倉取其意　以代葛亜卿作詩云　君住江濱起畫楼　妾居海角送潮頭　潮中有妾相思淚　流到楼前更不流　唐孫叔白有経照應温泉詩云　一道泉回繞御溝　先皇曽向此中遊　雖然水是無情物　也到宮前咽不流　子蒼末句　又用孫語也　復斎謾彔（一四四７）」において、引用内容「晁元忠西畈詩云……又用孫語也」が先で、その後に書名の「復斎謾彔」が記されている。

4　漢数字は頁数で、本稿で使う『三体詩幻雲抄』のテキスト（１節に詳しい）に従う。アラビア数字は引用内容の開始の行数で、筆者による。以下同様。なお、古体・異体の漢字はできるかぎり残したが、一部ユニコードには文字がないものは、操作困難なため、通行の字体にあらためた。また、振仮名や返り点、見消ち・挿入符・転倒符・旁注・書き入れの指示などは反映していない。判読できない場合は□で示す。

5　書名が記されているか否かは「書物」の類と「単一の詩文」の類を区別する鍵だが、たいてい、それほど困らない。たとえば、最も多く引かれた東坡の詩の場合、「東坡集」（三四四12）や「坡集」（九六２）と記せば、東坡の別集だろうと常識的に見当がつく。このように記されていなくても、「東坡二十五巻」（三八五２）・「東坡第一」（四五四６）・「東坡詩十五」（二〇八20）・「東坡詩二十五巻」（二九三６）・「東坡詩第三」（四八七９）・「坡詩十九」（二三三８）・「坡詩第八」（四〇三３）などといったように、巻数の表示があれば、「書物」の類だと判断できる。これに対して、「東坡詩」や「坡詩」（三

節「一覧表」を参照）だけで、巻数が示されていない場合は、「単一の詩文」の類だと判断できる。

6 「淵云」は五山僧の九淵竜睨の説。『三体詩幻雲抄』では、このように後掲の（５）「雪樵本云」は蘭坡景茝の説で、（６）「趙瞻民義」は関東の某僧の説である。『三体詩幻雲抄』では、たいてい、このように僧侶の所説の前にその僧名を冠して掲げている。少数、「今周伯弼集此詩之大意　宋南渡以後　詩道寖変　近於排諧　雖如楊誠斎方秋崖者　皆承其弊也　秋崖秋日作云　秋日尋詩独自行　藕花香冷水風清　一凉轉覚詩難作　付与梧桐夜雨声　又漁父詩　沽酒飯来雪満舩　一簑撑傍断磯邊　誰家庭院無梅看　不似江村欲暮天　雪本（八三13）」とあるように、「雪本」（蘭坡景茝の説）が後掲するといったような箇所もある。なお、僧名については、坪井（1977〈625ぺ～629うぺ〉）において時代順に並べて示しており、参照されたい。僧名が記していない場合は、当抄物の編者月舟寿桂（号は幻雲）の説である。

7 「厳子安和」は明の人厳子安によって作られた『唐三体詩』の和詩（七言絶句の和詩163首）を収めた書物である。この書物の正体は十分明らかでないが、おそらく『唐三体詩』裴季昌注本系統（後１節を参照）を対象に作られ、明の1417年に成ったものである。後に、「次韻絶句」や「次三体唐詩三体家法絶句」など数種の写本が伝わっているようだが、中国国内において古くから散逸した。詳細は劉（2015）を参照されたい。

8 以下、本稿の２節、３節と４節においては、すべて劉（2017）における議論の進め方に従う。

9 110余箇所のうち詩がほとんどだが、詩でないのが十数箇所ある。たとえば、「黙云　夜半鐘實夜半也　月落――七日八日之夜　月亦當半夜而落也　月夜烏啼者　魏武帝詩　月明星稀　烏鵲南飛之謂乎　霜満天云々　東坡赤壁賦曰　白露横江　水光接天云者　露欲降之候也　霜満天　言夜半冷氣逼身　霜欲降而未降　其氣満天也（一三五７）」とか、「王元之竹樓記云　公退之暇　披鶴氅　戴華陽巾　手執周易一巻　焚香黙坐　消遣世慮（四四八１）」とか、宋代の詞や散文の類が見られる。

10 『漢文大系（第二巻）』（冨山房）に収められている。

11 本稿では、以下に述べるように、このような場合について「書物」の類に入れてよい可能性を指摘することにとどめ、いったいどの書物から引いたのかについては、深く追求しない。今後の課題としておきたい。

12 必要に応じて、抄文の対象となる『唐三体詩』の詩句を示しておく。なお、使用テキストに併載している原典の本文に従う。１節で紹介する「体裁」を参照されたい。

13 体裁上、タイプⅠ「作者名＋篇目名＋引用の詩文」に合っているもので、同じような事情があっても不思議ではないが、今回は一回きりの調査で、見落したのかもしれない。

14 後掲表１を参照されたいが、（　）内は当抄物において記し方である。そのうち、「韓駒（韓子倉）」「朱熹（朱元晦）」・「徐似道（徐淵子）」・「沈括（沈存中）」・「張舜民（張芸叟）」・「李新（李元應）」「陸游（陸放翁）」と示したのは字を使う場合であり、「釋居簡（北磵）」・「戴復古（戴石屏）」・「陳與義（簡斎）」・「方岳（方秋崖）」・「葉元素（葉苔磯）」・「楊万里（楊誠斎）」と示したのは号を使う場合であり、「胡仔（漁隠）」・「黄庭堅（山谷）」・「釋道潛（参寥）」・「蘇軾（東坡・坡）」・「陳師道（陳後山）」と示したのはそれぞれその号である「山谷道人」・「参寥子」・「東坡居士」・「後山居士」の一部を使う場合である。また、「欧陽修（欧陽）」と示したのは姓だけを使う場合であり、「王安石（荊公）」・「釋契嵩（嵩明教）」・「林逋（林和靖）」・「欧陽修（欧陽公・欧）」と示したのは当時五山僧の間で通用している呼び方を使う場合である。ほかに、「寇準」「葉紹翁」「鄭碩」「盧贇元」の四人については姓名によって記している。なお、『全宋詩』において、当該作者の詩を載せる開始頁に作者の履歴を綴っており、本稿では、姓名・字・号についてそれによる。

15 「捻将――」の右傍に「見于前」とあり、つまりそれより数行前にある「都将二十四橋月　換得西湖十頃秋」（［２］）を見る意。ただ、「捻将」が「都将」となっており、誤記だろうか。

16 『苕渓漁隠叢話前集』巻34に「遁斎閑覧云　唐人詩　濃緑万枝紅一点　動人春色不須多　不記作者名氏　鄧元孚曾見介甫親書此両句於所持扇上　或以為介甫自作　非也」とあり、本来は唐人詩だが、王安石詩と誤解されているという意。『全唐詩』巻23〈8965頁〉に「濃緑万枝紅一点　動人春色不須多」とあり、無名氏詩残句として載っている。五山僧も唐人詩を王安石詩に誤記しただろう。

17 「淮南云々」とあるのは、同頁11行先に引かれた山谷詩「淮南二十四橋月　馬上時々夢見之」（［13］）を略して記しているだろう。

18 薛能詩を山谷詩に誤記したようである。『苕渓漁隠叢話前集』巻14に「詩眼云　山谷常言　少時嘗誦

薛能詩云　青春背我堂々去　白髪欺人故々生　孫莘老問云　此何人詩　對曰　老杜　莘老云　杜詩不如此（後略）」とあり、また、『全唐詩』巻0559薛能「春日使府寓懐二首」詩（其一）に「一想流年百事驚　己抛漁父戴塵纓　青春背我堂々去　白髪欺人故々生……」とある。『三体詩幻雲抄』には「負我」とあり、『全唐詩』には「背我」とある。

19　［22］の「鬼門関外莫言遠」は「竹枝詞二首」其一で、［23］の「五十三驛是皇州」は「竹枝詞二首」其二である。４節で箇所数や詩数について議論する際の便を考えて、あえて［22］と［23］のように別々に掲げることにした。

20　『全宋詩』巻2790～2801（33031頁～33304頁）に釈居簡詩を収めているが、この詩は見あたらない。

21　『苕渓漁隠叢話前集』巻57に「東坡云　余謫黄州　休馬於逆旅祁宗祥家　見壁上有幅紙題詩云　満園秋光濃欲滴　老僧倚杖青松側　只怪高聲問不成　瞋余踏破蒼苔色　其後題云　瀣水僧宝磨　宗祥謂余　此光黄間狂僧也　年百三十　死於熙寧十年　既死　人有見之者」とある。僧宝磨詩を東坡詩に誤記しているだろうか。『全宋詩』にほぼ同様な指摘が見える。

22　『全宋詩』巻2813～2820（33453頁～33360頁）に戴復古詩を収めているが、この詩は見あたらない。王（2004〈74ペ〉）によれば、『中興群公吟稿戊集』巻一に「領客游鶴林寺竹院」と題し、「竹院雖存竹已荒　数声啼鳥話凄涼　春風馬上客重到　前日柳絲今更長」とある。

23　『全宋詩』巻833～838（9662頁～9711頁）に張舜民詩を収めているが、この詩は見あたらない。

24　「奕」は「弈」の誤記か。

25　『全宋詩』巻1114～1120（12631頁～12751頁）に陳師道詩を収めているが、この詩は見あたらない。

26　『全宋詩』巻2958（35240頁～35241頁）に葉元素詩を６首収めているが、この詩は見あたらない。

27　『全宋詩』に盧贇元詩を収めていない。

28　同一の詩が二箇所か三箇所にわたって引用されているため、箇所数（92 箇所）は詩数（83首）より多い。実際、欧陽修詩について、前掲表１の［２］と［３］は同一の詩である。ほかに、黄庭堅（［13］［14］）、蘇軾（［30］［31］［32］、［40］［41］、［43］［44］、［57］［58］）、張舜民（［67］［68］）、楊万里（［80］［81］）の数人についても同様な事情である。あわせて８首ある。

29　合計の箇所数は92箇所で変わらないが、詩数は83首より３首ほど多くなったのは、［２］と［３］、［13］と［14］、［30］と［31］と［32］の３組（３首）は同一の詩（前注を参照）であり、しかも、二タイプにまたがっているためである。

30　左の欄は個々の作者の詩が引かれる箇所数を示す。たとえば、王安石詩も欧陽修詩も４箇所引かれている場合、箇所数４のところに入れる。左の欄の数字は詩数を示すが、「韓駒」「胡仔」など17人の場合はみな１箇所のみで、詩数１を特に示さない。

31　タイプⅠには［24］［67］［68］［76］［87］［92］の６箇所で、５首（［67］と［68］は同一の詩）あり、タイプⅡには［10］［18］［66］［80］［81］の５箇所で、４首（［80］と［81］は同一の詩）ある。計11箇所で、９首ある。

32　表２に示す各タイプの箇所数から、注33に掲げる該当タイプの箇所数を引くと、ここの箇所数となる。

33　なお、たとえば［27］（朱熹詩）について、「山烟（当抄物）－荒煙（全宋詩）」のように、一箇所相違している場合は、「一箇所」の後に掲げる。二箇所、五箇所については同様に処理する。

34　［15］［33］［34］［51］［53］［54］［74］［75］［79］については同様な事情である。

参考文献（本稿で言及・引用したもののみ）

大庭　脩・王　勇（1996）『日中文化交流史叢書　9　典籍』大修館書店

王　嵐（2004）「『詩淵』所収戴復古集外詩」『古籍整理研究学刊』2004年第１期

神田　喜一郎（1987）『神田喜一郎全集　第八巻』同朋舎出版

谷澤　尚一（1977）「解説」中田祝夫編・抄物大系『国立国会図書館蔵三体詩素隠抄』勉誠社（1977.９）、巻末所収

陳　斐（2010）「『三体唐詩』版本考」『斉魯学刊』2010年第２期

坪井　美樹（1977）「解説」中田祝夫編・抄物大系『内閣文庫蔵天文五年写本　三体詩幻雲抄』勉誠社（1977.６）、巻末所収

村上　哲見（1978）『中国古典選29　三体詩（一）』朝日新聞社

劉　玲（2009）「注釈中国古典文献的日本漢籍抄物――以日本内閣文庫藏天文五年写本『三体詩幻雲抄』

為例」北京師範大学学報（社会科学版）2009年第４期
劉　玲（2013）「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」筑波大学日本語日本文学会『日本語と日本文学』55号
劉　玲（2015）「「厳子安和」に関する覚え書き―『三体詩幻雲抄』など三体詩抄物を資料に―」筑波大学日本語日本文学会『日本語と日本文学』58号
劉　玲（2017）「内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』における唐詩の引用の状況」北海道教育大学旭川校国語国文学会『旭川国文』第29号
『漢文大系』（第二巻　箋解古文眞寶　増註三體詩　箋註唐詩選）冨山房、昭和十三年（1938）増補
『苕溪漁隠叢話前後集』（12冊、影印本、叢書集成初編2559～2570）中華書局、1985
『全宋詩』（72冊、傅璇琮ら主編）北京大学出版社、1991-1998

（リュウ　レイ　北京師範大学外国語言文学学院日文系　副教授）